

春風秋霜

4月号

平成30年4月2日
島田市教育委員会だより
教育長 濱田和彦

春風をもって人に接し、秋霜をもって自らを慎む 佐藤一斎

1 平成30年度のスタートにあたって

平成30年度がスタートします。新しい仲間を迎え、新しい学校組織が決まり、新教育課程が動き始めます。子供たちも新たな気持ちで新年度を迎えると思いますから、その気持ちを受け止めた出会いをお願いします。

私は、これまで学校運営に大切なことは、「笑顔・やりがい・仲間」と言ってきました。どんな困難も笑顔が絶えない集団なら乗り越えられます。仲間の頑張りを評価し合う集団には、やりがいを持って努力する人が増えます。普段から声を掛け合う仲間意識が定着していれば、孤立感に悩む教職員は生まれません。このような集団は、誰かにつくってもらうのではなく、一人一人が意識してつくり上げるものだと思います。島田市内の各学校が笑顔と充実感の溢れた学校になることを願っています。

本年度は、働き方改革という視点も大切になります。教育は、どんなに時間をかけても、これによしとする限界はありません。やればやるほど新たな課題が明らかになるからです。私は附属静岡小学校に勤務した時、長い時間をかけて教材研究を行っていました。しかし、準備に追われ疲れている時は、子供の素晴らしい表れに的確な対応ができず、悔しい思いを何度もしました。6年間の附属小勤務で学んだことの一つは、研究授業の前日にしっかり睡眠をとることです。子供のために努力することは大切ですが、教師の予想を超える子供の表れに対応するためには、教師の休養も大切です。

2 読む力について

内外教育（2月20日号）に毎日新聞論説委員の澤 圭一郎氏が書いた「読む力への懸念」という文章があり、そこに国立情報学研究所の実施したテスト結果がありました。

「幕府は、1639年、ポルトガル人を追放し、大名には沿岸の警備を命じた」

「1639年、ポルトガル人は追放され、幕府は大名から沿岸の警備を命じられた」

この二つの文章が同じ意味かという問いに、中学生の42%、高校生の27%が同じと答えているそうです。文脈を正しく読み取れない子供は、問題に正しく答えることができません。また、同研究所の新井紀子教授は、中学生の37.6%、高校生の27.9%が主語と目的語を正しく読み取れなかったという調査結果を教育新聞（11月16日）に載せています。また、新井教授は、教科書が読めなくては一人で勉強ができず、勉強の仕方が分からなければ、AIに職を奪われると指摘しています。

これらの結果を見ると、どのクラスにも読解力不足の子供がいると考えなくてはなりません。読解力を国語科の課題とせず、全ての教科における課題と捉えて、指導を行わなくてはならないと思います。

3 「誰かの役に立った活動体験記」「自分の生き方が変わった体験記」について

今年も各学校の協力によって体験記が完成しました。本年度は、334人の応募がありました。

教育委員は、12月から1月にかけて読み合い、選考をしてきました。本年度は、感動的な作文が多く、優劣をつけることに大変苦慮しました。また、失敗や自分の弱さを見つめた作文もあり、内容の広がりも感じました。

この体験記に載せる作文数は、学年間のバランスに配慮しましたが、学校間の調整は行わなかったため、結果的に記載されない学校が数校出てしまいました。申し訳ありませんでした。

この体験記は、各学校において、読み聞かせに使ったり、道徳の教材として使ったりと様々な活用が行われています。また、毎年、「明るく安心して暮らせるまちづくり市民大会」でも代表者が発表しています。今後も体験記の活用をお願いします。

4 保幼小の連携について

3月6日（火）に教育委員がみどり認定こども園を訪問し、小学校と保育園・幼稚園等との連携について意見交換をしました。子供たちの成長のためには、これまで以上の連携が必要ということでは意見の共有ができました。

その中で、園側からの意見として、小学校入学前の情報交換より、子供の実態が把握できた5月ごろの情報交換が重要という意見が出されました。入学前の情報交換は、新一年の担任ではない教員と行われることが多いため、十分な引継ぎが行われていない場合がある上、顔が分からない状態での情報交換は、その情報が活かしにくいと言うのです。

各学校では、幼稚園等から送られてくる資料を十分に把握するとともに、入学後の園との情報交換を大切にしたいと思いました。

肘かけ椅子

原 喜恵子 教育委員

「孫の成長にびっくり」

「ばあば、一緒に遊ぼう。」

お店屋さんごっこや病院ごっこなど、三歳の孫の言葉に誘われて毎日あっという間に時間が過ぎていきます。

私は、産後8週間で仕事に復帰し、退職するまで朝早くから夜遅くまで仕事仕事の生活を送ってきました。家のことや子供のことは全て義母任せで、子供の成長や変化を感じ取る心のゆとりもありませんでした。

そんな私が、退職後に孫のお世話をすることになったのです。「自分の子供も満足に育てられないのに」と不安でいっぱいでした。しかし、毎日一緒に過ごす中で、お乳から離乳食、ハイハイから伝い歩き、おむつからパンツ、発する言葉も単語から短文にと、わずかな期間で次から次へと人間らしさを身につけていく孫の姿に、不安より驚きでいっぱいになりました。目の前で起こる変化に、我が子の時には感じなかった人間の持つ不思議な力に、心から「すごい！」と感激しました。そして、この時間が子供の成長にとってどれほど大切な時間であるのか、その重要さも強く感じました。

「いやいや」や「だめ」と反発することもあり、腹が立つことも多くありますが、「ばあばの作るご飯おいしいね。ありがとう。」そんな優しい言葉を発することができるようになった三歳の孫のために、今日も苦手な料理をがんばろうと思います。

